

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス

SUN通信 第10号

2020. 3. 23 発行

NPO法人 自立支援事業所
サンレジデンス

〒011-0023

札幌市北区北23条西5丁目

1-18 Dio23ビル3F

TEL 011-746-8889

FAX 011-758-1166

心からの感謝を込めて

今シーズンの札幌の冬は、1月までは記録的な雪の少なさで、除雪や車の運転等、随分と楽な日々が続きました。ところが2月に入ったとたん大雪が続き、結局のところ積雪量は例年並み、ちゃんと帳尻が合うものだなあと、げんなりした気分にもなりましたが、そこは気持ちを切り替えて日々の業務に勤しんでいます。第2事業の拠点であるSUN南郷5では、高齢の入居者に対する介護サービス、在宅治療等を行う協力団体の車が頻繁に出入りするため、毎朝駐車スペースを確保しなければなりません。そんな中、除雪に悪戦苦闘するスタッフを見かねたのか、近所に住む一般の方が、所有している重機を稼働してくださり、除雪作業を手伝ってくれました。少し分かりにくいかもしれませんが、横の写真はあつという間に駐車スペースを作ってくださった後のものです。



私たちサンレジデンスがNPO法人として生まれ変わってから、現在活動は6年目に入っています。活動内容や年間行事の様子を紹介する手段として発行を始めたこのSUN通信も、今回が第10号となりました。この間、少しずつではありますが、私たちの活動に賛同し、支援を申し出てくださる方々が着実に増えてきました。

協働している(株)アパートナー東北支社では、各店舗で寄付を募っていただき、2度にわたって温かい御志を受けました。匿名希望という名目で、一般の方からの入金もありました。そして、以前より定期的に寄付を続けてくださっている方々にも私たちは支えられています。心より感謝申し上げます。

また寄付だけではなく、前記した除雪作業のように、具体的な作業レベルでの協力を申し出てくださる方もいます。SUN南郷5では、事業立ち上げ当初から施設内での食事提供を行っていますが、スタッフの減少により、昨年10月頃にそれが危ぶまれる状況になっ



てしまいました。さてどうしたものかと頭を悩ませていた時、サンレジデンスで生活しているある女性入居者が、その役割を買って出てくれました。

それ以降彼女は、高齢入居者の体調面を考え、実に細かい配慮のもと、1日3回の食事を作ってくれています。

このように、私たちの困窮者支援活動は、こうした方々の理解と協力によって、私たちこそ

支援されながら初めて成り立つのです。自分たちの力だけでは及ばない事象はどうしても出てきます。そんな時、活動を見守ってくださる支援者がいることは、私たちにとっても有難く、そして心強いものであります。そのことを常に念頭に置き、さらに丁寧な支援活動を行っていきたいと考えています。

入居者の最後に向き合う時

ちょうど3年前にサンレジデンスに入居されたNさんが、全身に転移したガンのため、令和2年2月17日、まだ60歳という若さで逝去されました。振り返ってみると彼のこの3年間は、常に病気との戦いだったように思います。

Nさんは北海道内において教員として勤め、小・中学校で音楽を教えていました。しかし8年前、たった一人の身内である母親が体調を崩し、その看病を行うために教員を辞め、母親の住む市営住宅に移りました。その後、母親は認知症も患い、その症状がどんどん悪化していったため、とても仕事ができる状態ではなかったそうです。その間の生活は国民年金と遺族年金で何とか凌いでいたと言います。そして約5年間の看病が続いたのち、平成28年12月、お母さんは亡くなりました。

この時、Nさんは母親を失っただけでなく、住居をも失うこととなります。市営住宅では、例え当事者の息子であっても名義変更が認められず、Nさんは部屋を出ていかなければならない状況になったのです。どんなに交渉しても、役所は決まり事、規則の一点張り、挙句の果てにはドアノブをロックされてしまい、部屋に入れなくなりました。突然行

き場を無くしたNさんは警察に相談、他支援団体を経由してサンレジデンスにたどり着きました。しかし、今度はNさん自身の身体に異変が起きます。大腸にガンが見つかったのです。

ここからNさんの、壮絶とも言える闘病生活が始まります。入院、手術、退院という日々が続きました。それでも本人は常に前向きで、病気と闘う意思を持って生活し、私たちにも明るい笑顔を見せてくれていたのです。でもガン細胞は、彼の身体を容赦なく攻撃していきます。膵臓、舌、肺、前立腺等、身体のいたるところに転移していきました。

懸命の治療もむなしく、ガンは彼の身体を蝕んでいきます。抗がん剤治療も効果が出ず、最後はモルヒネを使った終末治療へと移行せざるを得ない状態になったのです。

この時、病院側からある提案がなされました。それは今の家を引き払い、終末治療に対応できる施設、あるいはホスピスに転居してはどうかというものでした。私もその方がNさんにとって良いのではないかと思い、彼の気持ちを確認するためにお見舞いに行ったところ、彼の口からこんな言葉が返ってきたのです。



Nさんの部屋 窓辺には装飾品が綺麗に並んで・・・

「でもそれだと、サンレジデンスとの縁は完全に切れてしまうのですよね・・・」

この言葉を聞いたとき、私の胸には何とも形容しがたい切なさや理不尽さが込み上げてきました。Nさんは3年前、サンレジデンスに来て良かったのでしょうか。狭い1ルームでの生活が幸せだったのでしょうか。私は考えてしまいます。こんなに実直に生きてきた人が、こんな生活でも幸せに思うしかなかったのだとしたら、やはり世の中の仕組みが根幹から間違っているように思えてならないのです。

Nさんは最後まで転居を望みませんでした。そして今年1月中旬に入院して以降、彼は自分の部屋に戻ることなく、病院のベッドで息を引き取りました。

後日、Nさんの部屋を確認しに行ったところ、彼が寝ていたと思われる布団の横に、お母さんの遺骨が置かれていました。

彼を担当していたケースワーカーと霊園にお願いし、一緒に納骨してもらうことになりました。ご冥福をお祈りいたします。

パンデミックについて思うこと

新型コロナウイルスの感染拡大が止まらない中、異様な閉塞感が世界中を包み込んでいます。感染の収束が見えず、特効薬もない今の状況では、ありとあらゆるものに自粛が求められるのは仕方ないのかもしれませんが。学校に通う子供たちの姿が消え、マスクをしていなければまるで非国民のような視線を感じてしまう環境下において、誰もが相当のストレスを溜め込んでいると思われまます。感染を収束させることはもちろん大切です。不眠不休で働いている医療従事者の皆様には、只々頭が下がる思いです。そして今、それと同様に重要なのが、自粛解除のタイミングを見誤らないことだと、私は考えています。

行動の制限がこのまま続けば、すでに大打撃を受けている経済活動がさらに悪化の一途を辿るのは容易に想像できます。違う言い方をすれば、また新たな弱者と差別が生み出されるということです。「派遣で会場設営の仕事をしていたが、コロナの影響ですべて無くなり収入が得られず、生活できない」という相談が、早くも私たちのところに入っています。

私たちの活動においても、万が一スタッフが感染し、入居者にうつしてしまったとかなれば大変なことです。しかしそれを恐れて私たちが何も出来なくなれば、入居者はもっと困ってしまいます。つまり、このウィルスの最も恐ろしい点は、感染力や症状云々よりも、人間社会から活力を奪い去っていくところにあると思います。また、少し考えれば分かりそうな嘘の情報に振り回され、店頭からマスクやトイレットペーパーが消えていった事は、人々の心に植え付けられた、根拠のない恐怖心が連鎖した結果、招いてしまった事象といっても過言ではないでしょう。1973年に起きたオイルショックの時も同様でした。

研究が進み、ウィルスのリスクが低くなることはあっても、完全にゼロになりましたと言いきれることは、おそらく今後もあり得ません。

失われた活力を取り戻すために大切なのは、風邪やインフルエンザと同じように、このウィルスと付き合っていくのは必然であり、必要以上に怖がるものではないと、人々がしっかり認識することではないでしょうか。

連日報道される感染者・死亡者数の増加、行政の対応の拙さ、世界各国での出入国の規制、顕在化し始めているコロナの影響による企業の倒産等、不安を煽り立てる空気が、ウィルス以上に蔓延しています。すでに国や政治がそれを食い止めるという次元ではないように思います。今、世界中で暮らす人々一人ひとりの知恵と行動力が問われているのかもしれない。